岡崎遺跡の方形周溝墓について

会下　和宏

1．はじめに

岡崎遺跡は、鴨川の東、現在の岡崎公園一帯に所在する。弥生時代から古墳時代にかけての集落遺跡で、上層においては院政期の六勝寺にも比定される。1992年、勧業館の建て替えに伴う発掘調査において総計10基におよぶ方形周溝墓が検出された。鴨川東域の方形周溝墓に関しては従前の調査で散在的に検出されていたものの、これだけまとまって検出されたのは初めてのことである。

小稿では、当遺跡における方形周溝墓の概要、考察について論じたい。

2．立地と環境

調査地は、鴨川の東、白川氾濫原の南部に立地し、北東から南西方向に緩やかに傾斜する扇状地となる。また、東方にせまる東山を挟んで山科と接している。

方形周溝墓が検出された遺構面のレベルは、南隣する調査区の遺構面レベルに対し、約1.5m高く、この比高差は自然地形であると考えられる。調査区西側で検出された自然流路のさらに西側において段差が確認されており、これも当初の自然地形を利用したものと考えられる。こうしたことから方形周溝墓が緩やかな微高地上に営まれたことが分かる。

また、当調査区の北東約200mのところで庄内期の自然流路が検出[1]されている。自然流路は、幅約25mの氾濫原中を３～５mの河幅で北から南に蛇行している。

調査区周辺の方形周溝墓としては、北約400mのところで第Ⅱ様式期のものが２基、第Ⅳ様式期のものが２基検出されている[2]。

3．方形周溝墓の概要

方形周溝墓は、総計10基を検出した。

後世の削平により、すべての方形周溝墓において墳丘盛土および主体部は残存していなかった。

以下にそれぞれの方形周溝墓の概要について述べたい。（表１、図１）

１号墓

南北9.0m、東西9.0m。中軸線の方向はN－0°－Wである。

２号墓

南北9.1m、東西9.0m。中軸線の方向はN－35°－Wである。

３号墓

２号墓の東に位置し、南北7.8m、東西7.5m。中軸線の方向はN－35°－Wである。

４号墓

攪乱および削平により北辺と西辺の一部のみ残存する。南北6.5mで中軸線の方向はN－0°－Wである。

５号墓

４号墓の南に連接し、北辺と西辺の一部が残存する。中軸線の方向はN－0°－Wである。

６号墓

周溝心々間の距離は南北8.0m、東西8.5m。中軸線の方向はN－0°－Wである。10号墓の東および７号墓の西に連接する。北東隅および北西隅の周溝が切れる。

７号墓

周溝心々間の距離は南北7.0m、東西6.8m、中軸線の方向はN－0°－Wである。６号墓の東および８号墓の西に連接する。南東隅において周溝が切れる。

８号墓

周溝心々間の距離は南北8.5m、中軸線の方向はN－0°－Wである。７号墓の東に連接する。

９号墓

１号墓の西に位置し、後世の自然流路による削平によって東辺および南辺のみが残存する。南北10.5mで中軸線の方向はN－0°－Wで１号墓に平行する。

10号墓

周溝心々間の距離は東西7.0m、中軸線の方向はN－0°－Wである。６号墓の西に連接する。北辺が存在しない。

なお、連接する６号墓、７号墓、８号墓、10号墓には、ＳＤ209という推定幅約2.4m、深さ約1.0mの比較的大きな東西溝が掘削されており、この溝がそれぞれの方形周溝墓における南辺の役割を果たしていると考えられる。ＳＤ209については後述したい。

	周溝心々間の距離（南北×東西m）	中軸線の方向	グループ	出土土器
１号墓	9.0×9.0	N－0°－W	A	広口壺、広口壺（受け口状口縁）、細頸壺
２号墓	9.1×9.0	N－35°－W	B	甕（受け口状口縁）、鉢（受け口状口縁）、鉢、広口壺、高杯
３号墓	7.8×7.5	N－35°－W	B	甕、長頸壺、広口壺、壺
４号墓	6.5×？	N－0°－W	C	
５号墓	？	N－0°－W	C	
６号墓	8.0×8.5	N－0°－W	D	長頸壺
７号墓	7.0×6.8	N－0°－W	D	広口壺
８号墓	8.5×？	N－0°－W	D	長頸壺
９号墓	10.5×？	N－0°－W	A	
10号墓	？×7.0	N－0°－W	D	広口壺

表１　検出された方形周溝墓の一覧

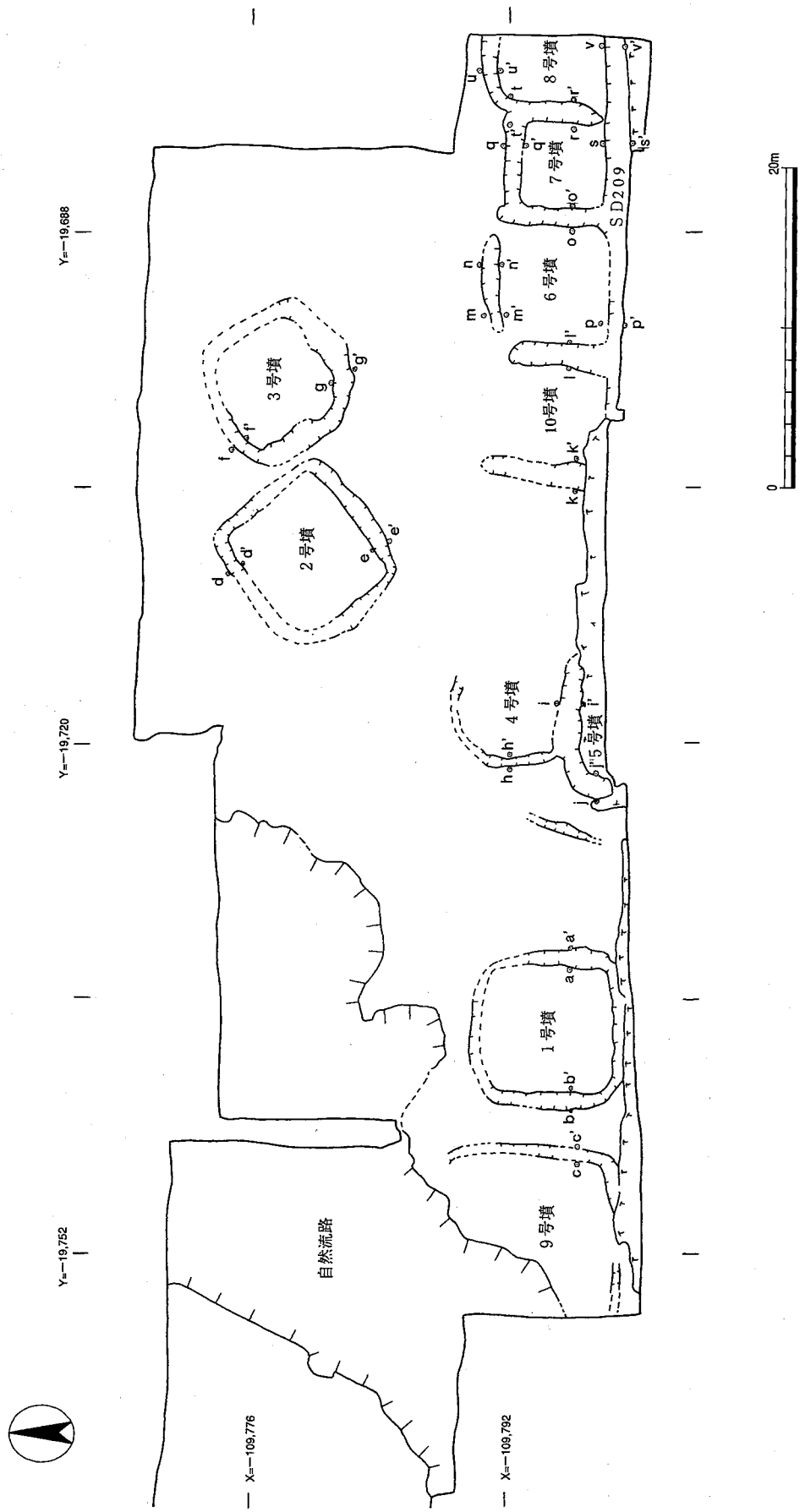


図1　遺構平面図（1／400）

4．方形周溝墓の群構成について

以上、10基の方形周溝墓は、位置関係、中軸線の振れ、連接の仕方などから、それぞれ４つのグループに分けることができる。

Ａグループ‥‥１号墓、９号墓。周溝を共有しない。中軸線が平行関係にある。

Ｂグループ‥‥２号墓、３号墓。周溝を共有しない。中軸線が平行関係にある。

Ｃグループ‥‥４号墓、５号墓。４号墓の南辺および５号墓の北辺を共有し、南北に連接する。

Ｄグループ‥‥６号墓、７号墓、８号墓、10号墓。４基が、南辺となるＳＤ209を媒介として東西方向に連列する。

Ａグループ、Ｂグループとも、墳丘規模（溝間の規模）が比較的大きいもの（９号墓・２号墓）と小さいもの（１号墓・３号墓）とに分かれ共通する。Ｃグループについては、削平や攪乱が甚だしく判然としない。Ｄグループの４基についてもＡグループ、Ｂグループと同様に墳丘規模の比較的大きいもの（６号墓・８号墓）と小さいもの（７号墓・10号墓）とに分かれる。

また、周溝を共有しないＡグループ、Ｂグループに比べ、周溝を共有して連接するＣグループ、Ｄグループは墳丘規模が概して小型である。

5．周溝の堆積状況の考察

調査では、基本的に方形周溝墓のそれぞれの辺につき２箇所のセクションを設定し断面を観察した。また、攪乱や削平によってセクションの設定ができない箇所もあった。特にＤグループの溝が接合する箇所に関しては、ほとんどが攪乱によって断面観察ができない状態であった。以下にそれぞれの周溝の堆積状況について主なものをグループ別に説明したい。

Ａグループ

１号墓東辺（図２）

幅0.9m、底部のレベルは47.3m。溝の形状は「Ｕ」字状を呈する。３層からなり、第１～２層は黒褐色砂泥、第３層は黒褐色粗砂である。

１号墓西辺（図２）

幅1.1m、底部のレベルは47.0m。おおむね「Ｕ」字状を呈するが、西壁が「Ｓ」字状の曲線を描く。５層で黒褐色砂泥などからなる。

９号墓東辺（図２）

幅0.6m、底部のレベルは46.9m。東壁は「Ｓ」字状の曲線を呈する。２層で黒褐色砂泥と暗褐色砂泥からなる。

Ｂグループ

２号墓北辺（図２）

幅0.75m、底部のレベルは47.0m。おおむね「Ｕ」字状を呈する。３層からなり、第１～２層は黒色および黒褐色砂泥、第３層はにぶい黄褐色粗砂である。

2号墓南辺（図2）

幅1.0m、底部のレベルは47.0m。「U」字状を呈するが、北壁が「S」字状の緩やかな曲線を描く。3層からなり、第1～2層は黒色および黒褐色砂泥、第3層は灰黄褐色粗砂である。

3号墓北辺（図2）

幅0.7m、底部のレベルは47.5m。溝の形状は底浅で幅広い「U」字状である。2層からなり、第1層は黒色砂泥、第2層はオリーブ褐色粗砂である。

3号墓南辺（図2）

幅1.3m、底部のレベルは47.4m。溝の形状は底浅で幅広い台形状である。2層からなり、第1層は黒色砂泥、第2層は褐色粗砂である。

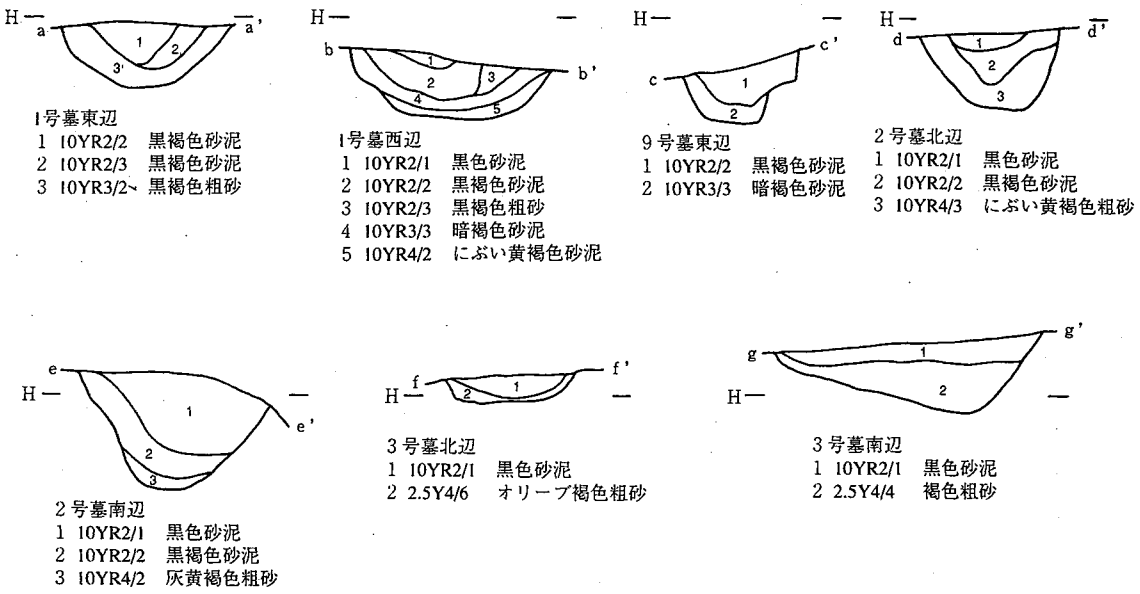


図2　1、9、2、3号墓周溝断面図（S＝1／40　H＝47.5m）

Cグループ

4号墓西辺（図3）

幅0.46m、底部のレベルは47.3m。西壁は「S」字状の曲線を呈する。2層からなり、第1層は黒色砂泥、第2層は黄褐色粗砂である。

5号墓北辺（図3）

攪乱によって南側を一部削平される。底部のレベルは46.65m。おおむね「U」字状だが北壁が「S」字状の緩やかな曲線を描く。10層からなり、第1～3層が黒色および黒褐色の砂泥、第4～10層が黒褐色砂泥および黄褐色あるいはオリーブ褐色砂などからなる。このうち、第1～3層はそれまでに堆積した土

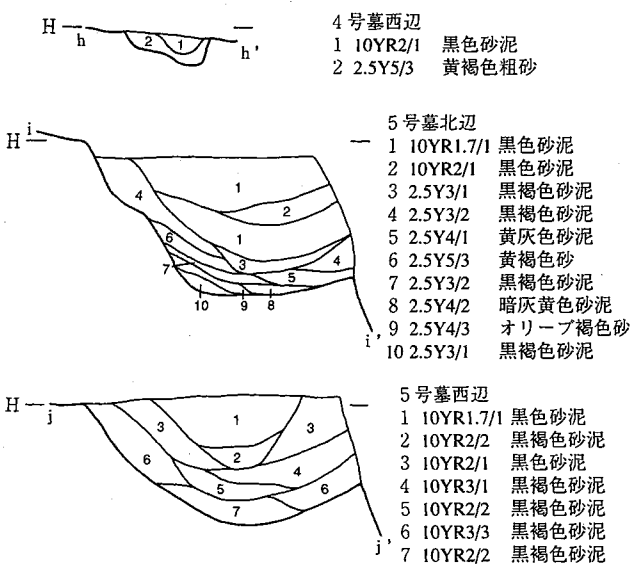


図3　4、5号墓周溝断面図（S＝1／40　H＝47.5m）

を掘り返した後に再び堆積した層であると考えられる。

5号墓西辺（図3）

攪乱によって東側を一部削平される。底部のレベルは46.9m。「U」字状を呈する。7層からなり、黒色および黒褐色などの砂泥からなる。

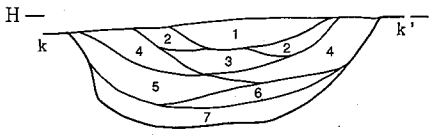
Dグループ

10号墓西辺（図4）

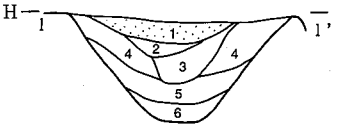
幅1.6m、底部のレベルは46.9m。溝の形状は「U」字状を呈するが、西壁は若干「S」字を裏返したような曲線を描く。7層からなり、第1～6層までは黒色砂泥あるいは黒褐色砂泥、第7層はオリーブ褐色砂である。このうち、第1～3層は、それまでに堆積した土を掘り返した後に再び堆積した層であると考えられる。

6号墓西辺（10号墓東辺）（図4）

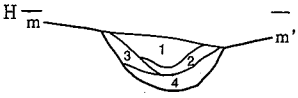
幅1.1m、底部のレベルは46.9m。溝の形状はおおむね「V」字状を 呈するが、両壁は若干「S」字状の曲線を描く。6層からなり、第1層の暗褐色砂、第2～3層の暗褐色砂泥および小礫を含む黒色砂泥、第4～6層の黒褐色砂泥との間に画期が認められる。



10号墓西辺
1 10YR1.7/1 黒色砂泥　5 2.5Y2/1 黒色砂泥
2 10YR2/1 黒色砂泥　6 2.5Y2/1 黒褐色砂泥
3 2.5Y3/2 黒褐色砂泥　7 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂
4 2.5Y3/1 黒褐色砂泥



6号墓西辺（10号墓東辺）
1 10YR3/3 暗褐色砂
2 10YR3/3 暗褐色砂泥（小礫を多く含む）
3 10YR2/1 黒色砂泥
4 10YR3/2 黒褐色砂泥
5 10YR2/2 黒褐色砂泥
6 2.5Y3/2 黒褐色砂泥（小礫を多く含む）



6号墓北辺西部
1 10YR2/1 黒色砂泥
2 2.5Y3/1 黒褐色砂泥
3 10YR2/2 黒褐色砂泥
4 2.5Y3/2 黒褐色砂泥

図4 6、10号墓周溝断面図（S＝1／40 H＝47.5m）

これらの画期は、それまでに堆積した土を掘り返した後、再び堆積した層であると考えられる。

6号墓北辺西部（図4）

攪乱によって上部を削平されている。底部のレベルは、47.1mである。黒色および黒褐色の砂泥からなる。

6号墓北辺東部（図5）

攪乱によって一部削平されている。推定幅1.1m、底部のレベルは46.9m。「U」字状を呈する。7層からなり、第1～2層のにぶい黄褐色粗砂および暗オリーブ褐色泥砂、第3～4層の黒色および黒褐色砂泥、第5～7層の黒褐色砂泥および黒褐色泥砂との間に画期が認められる。

6号墓東辺（7号墓西辺）（図5）

幅1.1m、底部のレベルは46.9m。溝の形状は6号墓西辺に類似し、おおむね「V」字状を 呈し、両壁は若干「S」字状の曲線を描く。7層からなり、第1層の黒褐色泥砂、第2～3層の暗褐色砂および暗褐色泥砂、第4層の小礫を含む黒色泥砂、第5～7層の黒褐色砂泥との間に画期が認められる。

6号墓南辺（SD209）（図5）

撹乱によって南半を削平されている。底部のレベルは46.9m。「U」字状を呈する。11層からなり、第1層は黒褐色砂泥で平安時代の瓦、土師器を包含する。第2～3層は黒褐色の泥砂および細砂、第4～5層は黒褐色粗砂およびオリーブ褐色細砂である。第6～7層は黒色および黒褐色の砂泥、第8～11層は黒褐色の砂泥および泥砂からなる。

これらの画期は、それまでに堆積した土を掘り返した後、再び堆積した層であると考えられる。

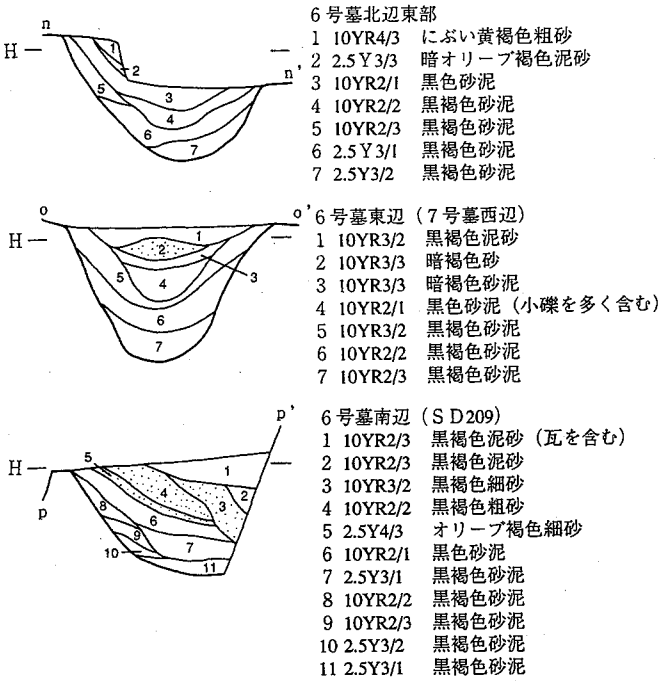


図5　6号墓周溝断面図（S＝1／40　H＝47.5m）

7号墓北辺（図6）

撹乱によって一部削平される。底部のレベルは47.3m。4層からなり、第1層は暗褐色砂泥、第2～3層がにぶい黄褐色粗砂および暗褐色泥土、第4層が黒褐色泥土となる。

第2～3層は第4層を掘り返した後の堆積層であると考えられる。

7号墓東辺（図6）

撹乱によって東側を削平される。底部のレベルは47.1m。6層からなり、第1～3層がにぶい黄褐色粗砂および黒褐色砂泥、第4層が黒褐色泥土、第5～6層が黒褐色泥土である。

7号墓南辺（SD209）（図6）

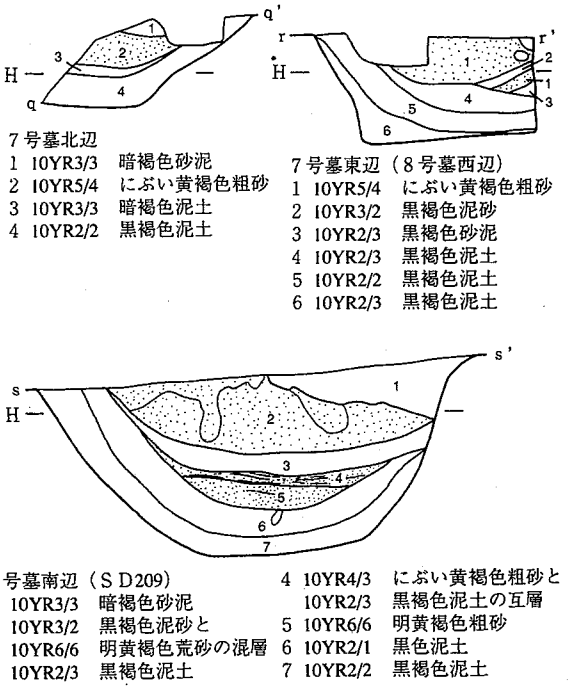


図6　7号墓周溝断面図（S＝1／40　H＝47.5m）

南部を撹乱によって削平される。推定幅2.6m、底部のレベルは46.7m。「U」字状を呈する。7層からなり、第1層は暗褐色砂泥で平安後期の瓦、土師器を含む。第2～3層は黒褐色粗砂、明黄褐色荒砂および黒褐色泥土からなり、遺物はほとんど含まない。第4～5層はにぶい黄褐色粗砂と黒褐色泥土が互層に堆積しており、洪水層であると考えられる。第6～7層は黒色泥土および黒褐色泥土で、第6層より、供献土器であると思われる第V様式の直口壷が出土している。

このうち第2～3層は第4～5層を掘り返した後の堆積層であると考えられる。

７号墓と８号墓の北辺の連結箇所（図７）

攪乱によって一部削平される。底部のレベルは47.1m。９層からなり、第１層の黒褐色砂泥、第２～３層の黒褐色粗砂およびにぶい黄褐色粗砂、第４～５層の暗褐色砂泥および黒褐色泥土、第６～８層の黒褐色泥土などの間に画期が認められる。

第６～８層は７号墓と８号墓の築造後において同時堆積したものと考えられる。また、これらの画期は、それまでに堆積した土を掘り返した後、再び堆積した層であると考えられる。

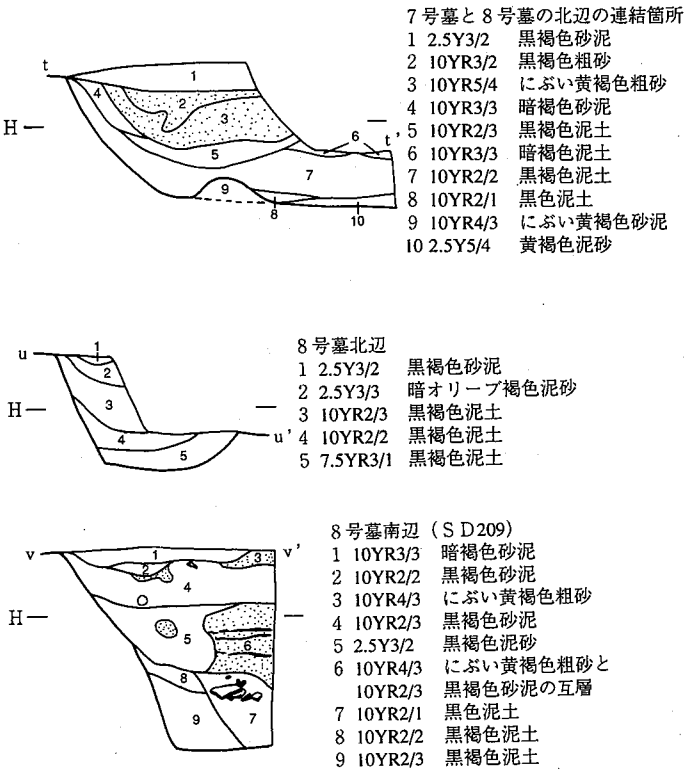


図７　８号墓周溝断面図（Ｓ＝１／40　Ｈ＝47.5m）

８号墓北辺（図７）

攪乱によって一部削平される。底部のレベルは47.2m。５層に分かれ、黒褐色泥土などからなる。

８号墓南辺（ＳＤ209）（図７）

攪乱によって南半を削平される。底部のレベルは46.8m。９層からなり、第１層は暗褐色砂泥、第２～４層は黒褐色砂泥およびにぶい黄褐色粗砂である。第５～６層は黒褐色泥砂、にぶい黄褐色粗砂および黒褐色砂泥の互層からなり、洪水層であると考えられる。第７～９層は黒色泥土および黒褐色泥土で、第７層より、供献土器であると思われる第Ｖ様式の長頸壷が出土している。

このうち、第７層は第８～９層を掘り返した後の堆積層であると考えられる。

以上のことからＤグループにおける溝の堆積していく過程を考察すると以下の通りになる。

初めにそれぞれの周溝において黒色あるいは黒褐色の泥土や砂泥が堆積する（６号墓西辺第４～７層・東辺第５～７層・北辺西部第３～４層・北辺東部第５～７層・南辺第８～11層、７号墓北辺第４層・東辺第６～10層・南辺第６～７層、８号墓北辺第３～５層・南辺第８～９層、10号墓西辺第５～９層）。７号墓において供献土器がこの層より浮いた状態で出土していることから、主に墳丘盛土の流出によって堆積したものと考えられる。この最下層は７号墓と８号墓においては同時堆積している。また、６号墓、７号墓、10号墓においては切りあい関係の有無などが不明であるため、築造順序を明らかにすることはできない。

次に、６号墓、８号墓、10号墓では堆積した土が掘り返された後、再び堆積する。（６号墓西辺第２～３層・東辺第４層・北辺東部第２～４層・北辺西部第１～２層、８号墓南辺第７層、10号墓南辺第１～４層）。８号墓南辺から供献土器が浮いた状態で出土していることから、８号墓

においてはこの層が墳丘盛土の流出によって堆積したものであると考えられる。

次に、ＳＤ209において洪水層の堆積がある（６号墓南辺第４～５層、７号墓南辺第４～５層、８号墓南辺第４～５層）。

次に７号墓において再び堆積層が掘り返された後、暗褐色あるいは黒褐色の泥土、泥砂が堆積する（６号墓東辺（７号墓西辺）第３層、７号墓東辺第４～５層、北辺第３層、南辺第３層）。

次に８号墓南辺において第２～４層が堆積する。

次に６号墓、７号墓においては再び洪水層と考えられる砂層が堆積する（６号墓西辺第１層・東辺第２層・北辺東部第１層・南辺第２～３層、７号墓北辺第２層・東辺第２～３層・南辺第２～３層）。

最後にそれぞれの最上層における堆積があり、完全に埋没する（６号墓東辺第１層・南辺第１層、７号墓北辺第１層・東辺第１層・南辺第１層、８号墓北辺第１～２層・南辺第１層）。７号墓南辺からは平安時代の土師器、瓦が出土していることから、この時期まで溝が継承あるいはくぼみとして残存していたことが考えられる。

６．遺物について

土器は、Ａグループの１号墓、Ｂグループの２号墓、３号墓から比較的多量に出土している。特に２号墓からは、周溝の残存状態が良かったことも考えられるが、最も多くの土器が出土している。Ａグループ、Ｂグループと比較すると、Ｃグループ、Ｄグループは土器の出土が少量である。Ｃグループは削平が激しいために一概に比較できないが、Ｄグループにおいては１基の方形周溝墓に対しほぼ１個体の土器が出土している。

図の土器は、ほとんどが完形あるいはひとつのまとまりを持って出土している。また、すべて周溝の底から浮いた状態で出土しており、当初墳丘上に供献されていたものが盛土の流出などによって周溝内に埋没したものと考えられる。

１号墓出土土器（図８）

１は体部が膨らむ広口壷である。口縁部がヨコナデ、体部外面がハケメのちナデ、体部内面がユビオサエのちナデによる調整が施される。

２は受け口状口縁を持つ壷である。口縁部はヨコナデ、体部外面はハケメによる調整、体部内面は未調整である。

３は玉葱状の平たい体部のみ残存するが、細頸壷であると考えられる。内外面ともナデによる調整が施される。

出土位置は、１が東辺北部、２が北辺中央部、３が西辺南部である。

型式的には、１～３とも庄内式であると考えたい。

２号墓出土土器（図９）

４は受け口状口縁を持つ甕である。分割整形によって作られ、口縁部内外面はヨコナデ、体部内外面はハケメによる調整が施される。体部外面にはススが付着している。

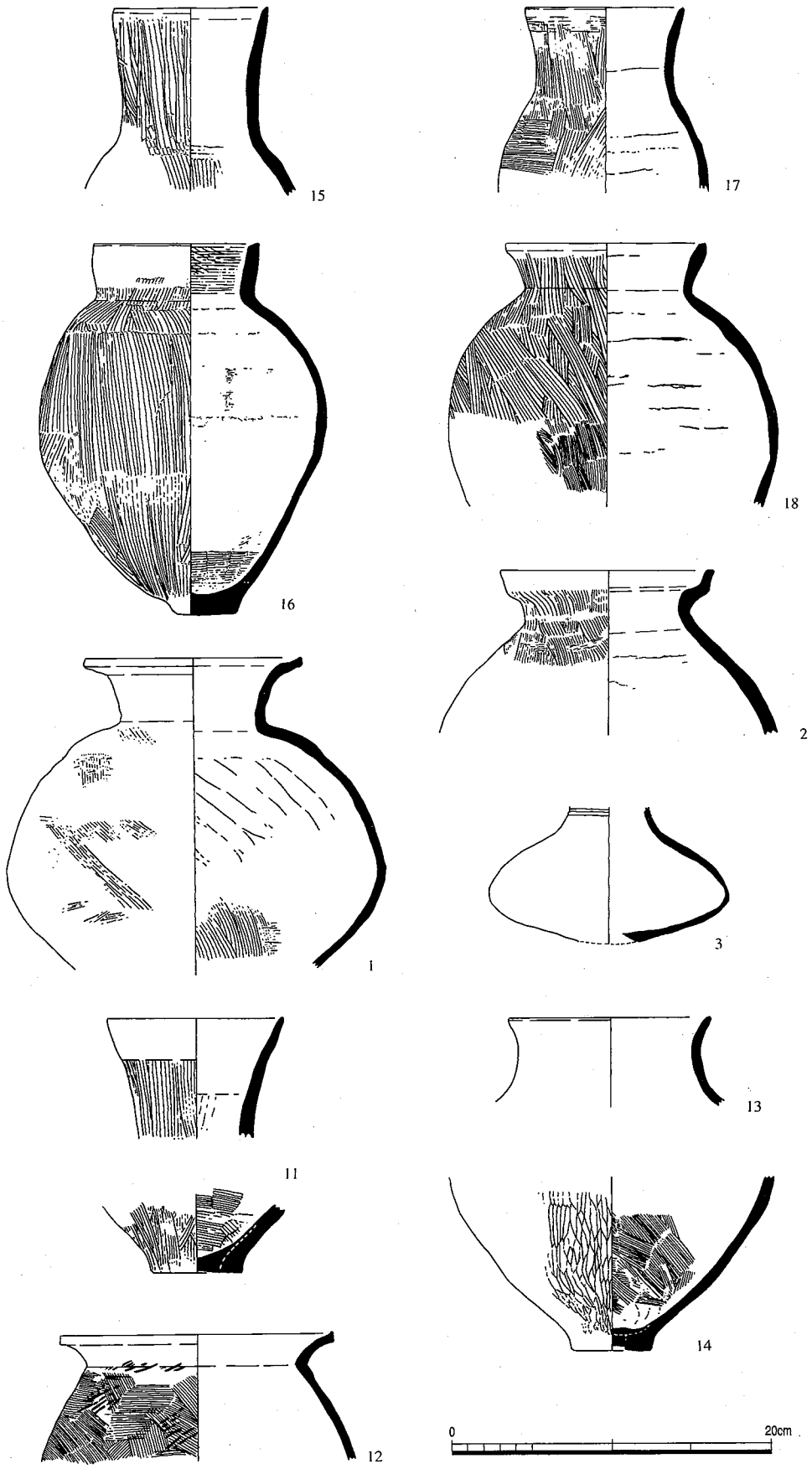


図８　出土遺物実測図　１～３（１号墓）、11～14（３号墓）、15（６号墓）、16（７号墓）、17（８号墓）、18（10号墓）

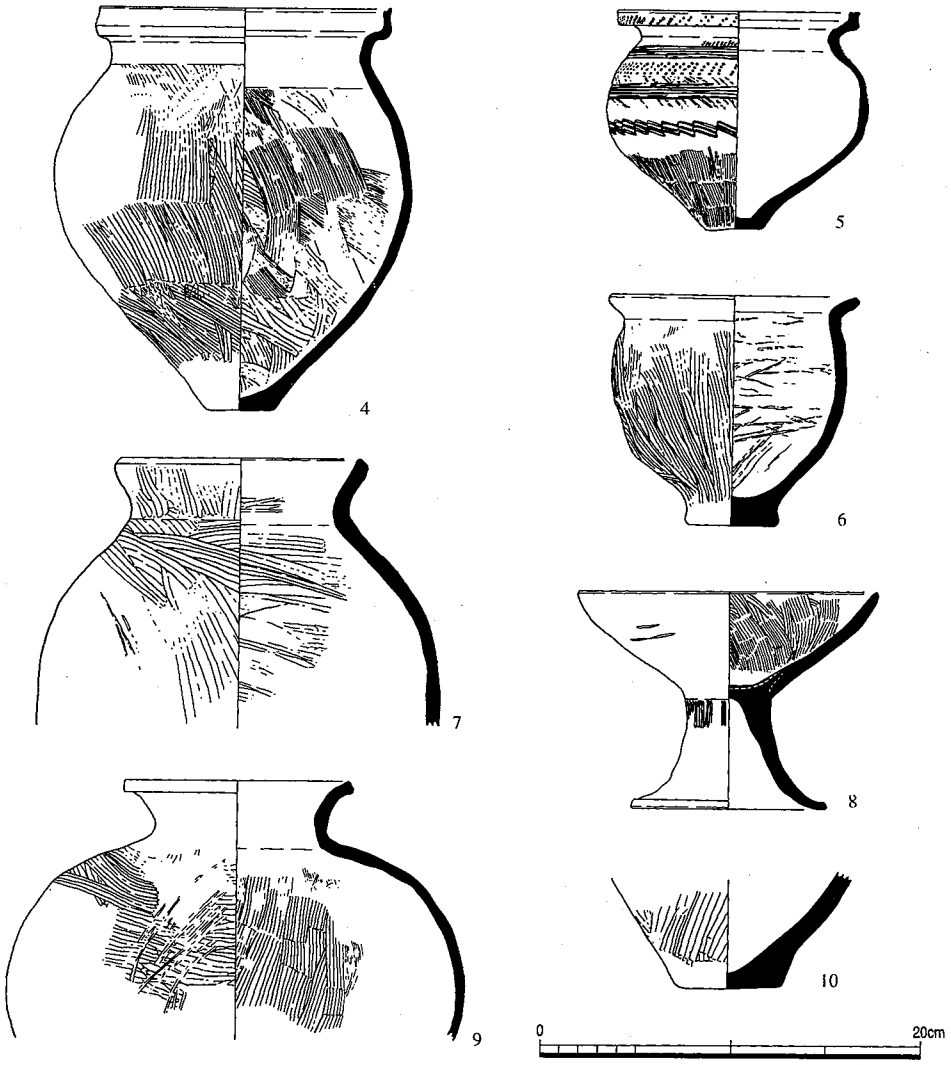


図９　２号墓出土土器実測図

５は受け口状口縁を持つ鉢である。外面は列点文、櫛ガキ文、波状文などの装飾が施され、ススが付着する。

６は鉢である。体部外面はハケメ、内面はヘラケズリによる調整が施される。

７は広口壷である。体部外面はハケメとナデ、体部内面はハケメによる調整が施される。

８は高杯である。口縁部はヨコナデ、杯部内面はハケメ、脚部はヨコナデによる調整が施される。

９は肩の張る体部を持つ広口壷である。口縁部はヨコナデ、体部外面はミガキ、体部内面はハケメによる調整が施される。

10は壷の底部であると考えられる。外面はハケメ調整である。

出土位置は、４が南辺中央部、５が南辺東部、６が南辺西部、７が東辺北部、８が東辺北部、９が西辺南部、10が東辺北部である。

型式的には、４～６、８が第Ⅴ様式の古い型式と考えたい。

３号墓出土土器（図８）

11は長頸壷で、口縁部、頸部と底部のみ残存する。口縁部はヨコナデ、頸部外面は縦方向のハケメ、頸部内面はオサエによる調整が施される。

12は在地産の庄内甕である。口縁部はヨコナデ、体部外面はタタキの上にハケメによる調整が施される。

13は広口壷の口縁部である。内外面ともヨコナデ調整である。

14は壷であると考えられる。外面はヘラミガキとハケメ、内面はハケメによる調整が施される。

出土位置は、11が南辺東部、12が東辺南隅、13、14が北辺西隅である。

型式的には、11～14とも庄内式の新しい型式のものと考えたい。

6号墓（10号墓）出土土器（図8）

15は長頸壷である。頸部外面は縦方向のハケメ、頸部内面は左上がり方向のナデ、指頭によるオサエ、ヨコナデによる調整が施される。

出土位置は、6号墓西辺（10号墓東辺）北部である。

型式的には、第Ⅴ様式と考えたい。

7号墓出土土器（図8）

16は広口壷である。頸部外面はヨコナデ、頸部内面はハケメ、体部外面はハケメ、体部内面はハケメのちナデ、底部内面はハケメによる調整が施される。

出土位置は、7号墓南辺（ＳＤ209）中央部である。

型式的には、第Ⅴ様式と考えたい。

8号墓出土土器（図8）

17は長頸壷である。口縁部外面は荒いヨコナデ、頸部、体部外面はハケメ、頸部内面はハケメによる調整が施される。

出土位置は、8号墓南辺（ＳＤ209）中央部である。

型式的には、第Ⅴ様式と考えたい。

10号墓出土土器（図8）

18は広口壷である。口縁部はヨコナデ、頸部、体部外面はハケメ、頸部、体部内面はヨコナデによる調整が施される。体部内面には指頭圧痕が残る。

出土位置は、10号墓南辺（ＳＤ209）中央部である。

型式的には、庄内式と考えたい。

7．墳丘の築造順序について

遺物の年代などの考察によって、それぞれの周溝墓の築造順序を推定したい。

周溝からの出土土器は、第Ⅴ様式および庄内式に大別される。

Ｂグループにおいては、2号墓から第Ⅴ様式の古い時期の土器が、3号墓から庄内式の新しい時期の土器が主に出土していることから、2号墓→3号墓の築造順序を想定したい。

Ａグループにおいては、9号墓からの出土土器が破片程度しかなく時期決定ができないが、1

号墓から庄内式の土器が出土していることから、９号墓→１号墓の築造順序を想定したい。

また、墳丘規模において、Ａグループ、Ｂグループとも先行する周溝墓の方が比較的大きく、後続する周溝墓が小さいという点が指摘できる。

Ｃグループにおいては、出土土器が破片程度しかなく、２基の周溝の接合箇所が攪乱によって削平されているため、前後関係が明らかでない。

Ｄグループにおいては、出土土器の時期から考えると、７号墓と８号墓の南辺および６号墓西辺出土土器の型式が第Ｖ様式で同時期であるのに対し、10号墓南辺出土土器の型式は庄内式である。６号墓西辺出土土器を６号墓の供献土器と考えるなら、６号墓、７号墓、８号墓は第Ｖ様式期に、10号墓は庄内式期に築造されたことになる。

しかし、周溝の堆積状況から考察すると、５章で述べたように墳丘盛土流出による堆積層と考えられる最下層が７号墓と８号墓においては同時堆積、その他についても同時期に堆積したと考えられ、４基の間に明確な時期差があるのかどうか判然としない。

８．ＳＤ209について

前述したように、Ｄグループにおける４基のそれぞれの南辺はＳＤ209という比較的大きな東西溝によってその役割がなされている。

ＳＤ209は、堆積状況の観察から幾度か掘り返された形跡がうかがえる。また、最上層において、平安後期の土師器や瓦が出土していることから、この溝が当時までくぼみとして残存していたことが考えられる。ＳＤ209を他の周溝と比較すると、特に７号墓、８号墓においては幅や深さに格段の差がある。ＳＤ209を平面図でみると明らかに一本の貫通した溝であるように思えるが、この溝が４基を築造する当初に掘削されたものであるのか、あるいはそれぞれの方形周溝墓を築造する際に順次掘削されたものなのかは判然としない。どちらにしろ、平面形態から４基の方形周溝墓は南辺を基軸として築造されているものと考えられる。南辺にあたるＳＤ209という直線の溝の存在はそれぞれの方形周溝墓を整然と連接させる役割を果たしているといえる。こうしたことから、この溝の持つ意義として、墳丘の占地を規定するための築造企画線的なものであると解釈したい[(3)]。

また、ＳＤ209からは、７号墓、８号墓、10号墓の墳丘上から転落したものと考えられる供献土器が出土している。このことから墳丘上のＳＤ209側に土器が供献されていたことが推測でき、これらの方形周溝墓の正面が南側であったのではないだろうかということも予想できる。推測の域をでないが、ＳＤ209が他の周溝に比較して大型であるのは、墳丘と外界を画する意味において正面である南側を意識していたことの反映ではないだろうか。

９．まとめ

前述したように、出土土器の年代から、当調査区においては第Ｖ様式期および庄内式期の２時期に渡って方形周溝墓が築造されたことが判明している。先行する方形周溝墓に、新たな方形周

溝墓が墳丘中軸線を合わせて隣合うという現象は、被葬者間に何らかの血縁関係を想定させるであろう。したがって、Ａグループ、Ｂグループのまとまりに関しては、累世的な築造の結果であることが推測できる。

Ｄグループの４基については築造順序などが明らかでなく、４基が順次築造されていったのか、同時に築造されたのかなどは分からない。また、調査区外の東側へさらに連接して築造されている可能性も考えられる。Ｄグループ内の方形周溝墓が血縁的な関係を媒介として結合しているのか、あるいは集団内の社会的、階層的な関係を媒介として結合しているのか、あるいはそれ以外の関係で結合しているのかは現段階では明らかでない。

周溝を共有しないＡグループ、Ｂグループに比べ、周溝を共有して連接するＣグループ、Ｄグループは供献土器の出土量も少なく、墳丘規模も小さい。これらの点だけから両者の間に格差の存在を断言することは早計であるが、周溝を共有しないものと共有して連接するものとの区別は集団内における優劣に要因があるのではないだろうかという想定もできそうである。こうした視点にＣグループ、Ｄグループにおける周溝連接の結合原理を探る手がかりがある可能性が残されていることを期待したい。特に当調査区の方形周溝墓群は第Ｖ様式から庄内式にかけてのものであり、この時期の社会や集団の構造を解明するうえでも有用であると考えられる。周辺調査による資料の増加に期待し、今後の課題としたい。

註

（１）ａ『岡崎グランドの発掘調査現地説明会資料』　（財）京都市埋蔵文化財研究所　1992年
　　ｂ「円勝寺の発掘調査（上）」『仏教芸術』第82号　円勝寺発掘調査団　1971年

（２）辻　裕司・鈴木廣司「尊勝寺跡」『昭和58年度京都市埋蔵文化財調査概要』　（財）京都市埋蔵文化財研究所　1985年

（３）こうした溝の類例として、時期が異なるが、神足遺跡右京第10次調査東地区のＳＤ1060がある。ＳＤ1060は第Ⅱ～Ⅲ様式の方形周溝墓１号、２号の北辺の役割を果たし、さらに東側に伸びている。
『長岡京市文化財調査報告書　第５冊』　長岡京市教育委員会　1980年
ＳＤ1060について久保哲正氏は「墓地の中で一定の規格性を生み出し、各周溝墓の占地場所に対して規制力が働いていたと見ることができるのではなかろうか。」と述べておられる。久保哲正「乙訓地方の弥生時代墓地について－長岡京市神足遺跡を中心にして－」『長岡京古文化論叢』中山修一先生古希記念事業会　同朋社　1986年